

2013 年度
関西学院大学 総合政策学部
白山麓実習プロジェクト

実習報告書

【執筆】

上林 真弓

野畠 章吾

他、2013 年度白山麓実習プロジェクトチーム

【編著】

野畠 章吾

－はじめに－

今年度、白山麓実習は4年目を迎えました。

石川県白山ろくテーマパーク^①の活性化策について公園ボランティア活動を通して考えた実習1年目、前年の実習で発表した活性化策（園芸福祉事業）を『キッズ☆すくすく園芸体験』と銘打ち試験導入した2年目、白山ろくテーマパークから白山手取川ジオパーク^②へと舞台を拡げて活動した（ワークショップ『始動！白峰探検隊』の実施）3年目。そして4年目の今年、「より総合政策学部らしいことを」という実習生の発案を受け、1年目以降継続している『政策提案発表会』に力を注ぐこと、また白山手取川ジオパークと白山ろくテーマパークを繋ぐ活動を展開すること、この2点を目標に実習を計画しました。

同時に、今年度は白山麓実習プロジェクト新生の年でもありました。まず、関西学院大学を昨年度末で定年退職された久野武先生から、後任の佐山浩先生へ責任教員のバトンが渡されました。次にゼミ実習から同大学総合政策研究科リサーチ・コンソーシアム（産官民学研究協力機構）の協賛事業へとプロジェクトの基盤が拡大しました。さらに実習卒業生が発足させた市民団体ツナグ白山麓から支援を受けることになりました。こうした中で、複数のゼミから集まった4回生を中心に実習に取り組むことになったのです。

プロジェクト型の実習は、実習生が自ら考え、企画した活動を現地に持ち込み、例えば白山手取川ジオパークや白山ろくテーマパークあるいは白山麓地域の活性化に資することが重要です。旅行の用意だけを持参し、あとは現地の指導者の指示に従って日程を消化するだけではボランティア実習です。そうではなく、実習生が能動的に現地の公共空間や地域の活性化に資する活動を計画、実施することにプロジェクト型の実習の意義があります。逆に言えば、学生の考えや計画が不十分だと現地の皆さんに喜んで頂けないばかりか、ご迷惑をおかけする可能性すら出てきます。したがって、現地で必要とされていることは何か、またそれを実施するためにはどんな準備をすべきか、実習生自身が十分に考え、対応して臨むことが求められます。その意味では、今年度の4回生はゼミが一人一人異なるために打ち合わせの時間を調整することにも苦労したようです。下級生とのコミュニケーションにとれる時間も限られており、まさに悪戦苦闘での準備期間となりました。

この報告書では、悪戦苦闘を乗り越えた4回生がどのような計画を持ち込み、3回生はどのような想いを抱きながら実習に取り組んだか記していきます。そして、現地の皆さんの反応や感想を受けて、来年度以降の白山麓実習プロジェクトをどのように形作っていくか述べたいと考えています。

2013年11月1日

白山麓実習プロジェクト主宰

野島 章吾

株式会社クロス クリエイティブ コア 代表取締役
関西学院大学 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアム
市民団体ツナグ白山麓 共同代表

① 石川県白山ろくテーマパークは石川県の都市公園（広域公園）。白山麓実習は同公園の指定管理者を受け入れ先として2010年度にスタートした。

② 2011年9月に日本ジオパークネットワークにより『日本ジオパーク』に認定された。白山市全域が指定されており、白山市統合のシンボルにもなっている。テーマは、「山—川—海そして雪 いのちを育む水の旅」。

目次

はじめに	p.2
1. 2013 年度白山麓実習の概要	
1-1 目的	p.4
1-2 実習生および引率者	p.4
1-3 関係団体および支援体制等	p.5
1-4 実習日程	p.5
1-5 実施拠点	p.5
2. 実習報告（日程にそって）	
2-1 8月21日（実習初日）「白山麓入り」.....	p.6
2-2 8月22日（実習二日目）「公園ボランティア」.....	p.7
2-3 8月23日（実習三日目）「白山手取川ジオパーク推進イベントの実施」	p.9
2-4 8月24日（実習四日目）「公園ボランティア、其の二」	p.16
2-5 8月25日（実習五日目）「政策提案発表会と懇親会」	p.17
2-6 8月26日（実習最終日）「帰阪」	p.22
3. 次年度の展望	
3-1 白山手取川ジオパーク推進協議会との連携	p.23
3-2 白山ろくテーマパークとの連携	p.24
3-3 吉野工芸の里との連携	p.25
3-4 市民団体ツナグ白山麓との連携	p.25
3-5 リサーチ・コンソーシアム協賛事業として	p.26
4. 総括	
「中小企業経営者の立場から見る白山麓実習」	p.28
おわりに	p.31

〔文末資料〕

2013 年度 関西学院大学 総合政策学部 リサーチフェア発表資料

※本書本文では、なるべく敬語・丁寧等を省略し、また敬称を「さん付け」とすることで、リアリティを重視して実習報告を行います。ご了承下さい。

1. 2013年度白山麓実習の概要

執筆：野島章吾

1-1 目的

- i. 白山手取川ジオパーク推進協議会が主催するプログラム『子どもジオ博士』^③の最終日（全3日間）において、実習生企画イベント『あいラブ白山♡我らジオパーク新聞社』を実施する。このイベントは『子どもジオ博士』の総復習を兼ねて、参加した小学生と実習生が白山手取川ジオパークを紹介する壁新聞を作製するもの。作製した壁新聞は白山市内の公共施設に順次掲示されることとなっており、これにより白山手取川ジオパークの啓発活動に貢献する。
- ii. オキナグサは石川県指定希少野生動植物種だが、手取峡谷の自生地では盗掘が度々問題となってきた。そこで手取峡谷近くの住民が積極的にオキナグサ保護に参画するためにはどのようなシステムを用いるべきか、国内の事例調査や関係者への取材を中心に考察、石川県および白山市職員、関係企業、住民に向けて発表する。
- iii. 石川県白山ろくテーマパーク内での公園ボランティアに取り組むとともに、指定管理者の自主事業を手伝うことで都市公園マネジメントの一端を学ぶ。また、公園スタッフ^④他公園周辺の住民との関係強化に努め、白山麓実習の継続、発展のための人的な土台を強化する。
- iv. 実習生各々の卒業論文研究、進級論文研究などのフィールドワークとして実習を活用する。
- v. 石川県白山自然保護センター、白山市観光推進部ジオパーク推進室、白山ろくテーマパーク指定管理者（株式会社岸グリーンサービス）、白山市吉野工芸の里（白山吉野地域振興協議会）、実習協力企業の金沢庭材グループ、市民団体ツナグ白山麓、地元住民、その他複数の関係者と連携して実習を行うことにより、実習生一人一人が白山麓の活性化を担うという当事者意識を持ち、実社会における現場感覚を養う。

1-2 実習生および引率者

上林 真弓	実習生代表	関西学院大学総合政策学部 4 回生	細見ゼミ
武本 千枝	実習生代表代行	同上	同上 今井ゼミ
岡本 紋奈	連携推進リーダー	同上	同上 ヘファナンゼミ
山本 理奈	三回生リーダー	同上	3 回生 佐山ゼミ
宇田 学		同上	同上 同上

^③ 白山手取川ジオパーク推進協議会が主催するイベント。3 日間のプログラムに参加すると『子どもジオ博士』に認定される。7 月～8 月にかけてジオパーク内のスポットを見学、化石発掘などの体験学習も行う。

^④ 公園スタッフは主に白山市シルバー人材センターに会員登録している地元の高齢者。

大槻 香菜	同上	同上	同上
垣内 万季	同上	同上	同上
白石 ひとみ	同上	同上	同上

佐山 浩 **実習責任教員、実習生の研究および発表指導**
 関西学院大学 総合政策学部 教授
 ※8月25日、26日に現地入り。

野島 章吾 **実習全般の指導および引率、関係先との渉外**
 関西学院大学大学院 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアム所属
 株式会社クロス クリエイティブ コア代表取締役（金沢庭材グループ）
 市民団体ツナグ白山麓 共同代表

実習生計 8名、引率者常時 1名

1-3 関係団体および支援体制等

(順不同)

主催 株式会社クロス クリエイティブ コア
 関西学院大学大学院 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアム
 関西学院大学 総合政策学部

受入 白山市観光推進部ジオパーク推進室
 石川県白山ろくテーマパーク指定管理者（株式会社岸グリーンサービス）

支援 金沢庭材株式会社
 市民団体ツナグ白山麓

協力 石川県土木部公園緑地課
 石川県白山自然保護センター
 石川土木総合事務所
 白山手取川ジオパーク推進協議会
 白山吉野工芸の里

1-4 実習日程

2013年8月21日～8月26日の5泊6日

1-5 実施拠点

実習場所 石川県白山ろくテーマパーク他
 宿泊場所 白山吉野工芸の里 アート&クラフト館

2. 実習報告（日程にそって）

執筆：白山麓実習プロジェクトチーム
(2-3は上林真弓)

2-1 8月21日（実習初日）「白山麓入り」

午前8時30分にJR京都駅八条口に集合、例年通りレンタカーのハイエース(10人乗り)で白山市を目指す。天候は曇り。週間天気予報を見る限り、今年度の実習は雨天の影響を受けそう。実習生の努力がどのように結実するか、少し不安なスタートとなった。

渋滞に巻き込まれること無く、北陸自動車道尼御前サービスエリアにほぼ予定通り到着、昼食をとる。実習中、この昼食以降は自炊である。

尼御前サービスエリアは、石川県南端に位置し橋立港を見下ろす高台にある。橋立港といえば、かつて多くの北前船が停泊し、船主達が財を成した港として知られる。明治時代に入ると海運業は廃れていくが、橋立町には現在も船主達の屋敷が点在し、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。こうした地域の歴史や文化について事前に詳しく知ってから実習に参加すると面白いのだが、当日になって初めて野島さんから話を聞いた実習生がほとんど。来年度に向けた反省点である。

実習初日の目的は、翌日からお世話になる白山市観光推進部ジオパーク推進室（以下、ジオパーク推進室）や石川県白山ろくテーマパーク（以下、白山ろくテーマパーク）、宿泊場所を提供頂く白山吉野工芸の里（以下、吉野工芸の里）に実習開始の挨拶をすることである。

午後2時30分、まずは白山市役所本庁3階のジオパーク推進室に到着。ジオパーク推進室では、今年度から新たに同室に配属された専門員の中村真介さん、及川敦美さん、廣川清美さんが出迎えて下さった。実習生を代表して上林が挨拶し、明後日に控えた『あいラブ白山の我らジオパーク新聞社』への協力について改めてお願いした。

ジオパーク推進室への挨拶を済ませ、ようやく白山麓に入る。午後3時30分、白山ろくテーマパーク吉岡園地に到着、公園所長の中村一彦さんが迎えて下さった。中村さんには白山麓実習初年度から受入体制の構築や公園ボランティアの対応の他、直接的に実習生を指導頂いている。

今年度は実習時期が早く、御盆休み明け直後になってしまった。御盆休みは白山ろくテーマパークにとって年間の最繁忙期にあたる。その直後ということで、中村さんはじめ公園スタッフの皆さんには大きな負担を強いることになってしまった。あらかじめ日程が決まっていた白山手取川ジオパーク推進協議会主催イベント『子どもジオ博士』と実習生の企画をタイアップさせているため、どうしてもこの日程以外に実習を行うことが出来なかったのである。心苦しい限りではあるが、実習生の活躍で公園の活性化に資したい。

白山ろくテーマパークへの挨拶を済ませた後は白山麓の見学。手取峡谷に向かった。この頃から雨が降ってきたため、車窓見学と短時間で綿ヶ



写真1 初日の綿ヶ滝

滝を訪れるのみとなる。しかし、峡谷の深さ、綿ヶ滝の迫力は圧巻で、実習生は大いに興奮する。断続的に雨が降っていたことで手取川の急流はいつそう激しく、谷を削る水の力を目の当たりにすることが出来た。

その後は、例年に同じく A コープ手取店で食材等を購入、今年度の宿泊場所となる吉野工芸の里に向かう。

吉野工芸の里は白山市の公共施設で、多彩な作家の皆さんが様々な芸術活動を行っている。我々が宿泊場所として提供頂いたアート&クラフト館も、本来は芸術活動を行う個人や団体に貸し出されるものであるが、吉野工芸の里を運営する白山吉野地域振興協議会の会長（兼同施設の館長）で、白山麓実習を初年度より支援して下さっている西出一久さんの厚意によって使用させて頂くこととなった。西出さんへの挨拶に赴いた際には、その厚意に報いるべく実習生一同心に期すものがあつた。また、こうした支援が受けられるのは、これまで白山麓実習を盛り立ててきた先輩方のお陰である。改めて先輩方に感謝する機会になった。

関係各所への挨拶を完了させ、自炊、入浴と翌日に備える。入浴は吉野工芸の里から車で7分程度の場所にあるめおと岩温泉ラクヨウを使う。白山麓実習過去3年の中では使用したことはなかったが、今年度は5泊6日全日程で訪れる。何人かの実習生は受付の職員さんに積極的に話しかけ、8月25日に予定されている政策提案発表会の宣伝をする者もいた。この宣伝が功を奏し、職員さん数名が4日後の政策提案発表会に出席して下さった。

以降は、翌日に備えてミーティング等を行い就寝となった。



写真 2 吉野工芸の里アート&クラフト館にて
初日の自炊、夕食

2-2 8月22日（実習二日目）「公園ボランティア」

午前9時に白山ろくテーマパークに到着、本格的な実習へと突入した。

はじめに、『白山ろくテーマパーク～指定管理におけるマネジメントについて～』と題したスライドを用いて、同公園指定管理者(株)岸グリーンサービスの宮腰和美さんが講義をして下さった。実習生は、指定管理者制度や都市公園マネジメントに関して事前に勉強してきているものの、実際に公園の中で働いている方の話を聞き、より正確なイメージを膨らますことが出来た。

講義後には、園内に飾る花苗ポットの作製・設置を行うグループと、園路整備を行うグループに分かれて活動した。

園内に飾る花苗ポットは、島田鯛子さんの指導で作製する。島田さんは吉野工芸の里の染色作家で、白山ろくテーマパークのガーデニングへの助言、また公園イベントの草木染め講習会で講師を務めるなど多岐に渡って活躍している。白山



写真 3 宮腰さんによる講義

麓実習でも初年度から指導頂いており、昨年は地元食材で作ったハーブカレーを振る舞って頂いた。白山麓実習は伝統的に女子学生が多いためか、食事のことや草花のこと等、島田さんとは会話が弾む。今年度も楽しい会話をしながらの作業となった。

一方、遠路整備は地元のシルバーさんの指導を受けながら行う。当日は複数のシルバーさんが勤務していたが、過去の白山麓実習で実習生と触れ合ったという方は「学生と会えることを数ヶ月前から楽しみにしていた」とのことだった。また、この日のためにわざわざ勤務に来られたという方もいた。園路清掃から除草などを行い、一段落してからは恒例の“休憩座談会”である。シルバーさんが持ち寄ったかき餅などを食べながら、今年の実習の企画、卒業した先輩たちの思い出話で盛り上がった。



写真 4 島田さん指導のもと花苗ポット作製



写真 5 シルバーさんと記念撮影

昼食時には、市民団体かわち山草会代表の小村茂さんにオキナグサの生態や保護活動に関する理念を話して頂いた。6月の下見の際には、石川県白山自然保護センター専門研究員の野上達也さんからオキナグサ保護に関する考え方を教示頂いていたが、小村さんの考えと合致していない部分が多く、実習生は3日後に控えた政策提案に向けて頭を抱えることになった。しかし、それは行政と住民の立場の違いが浮き彫りになったということでもあり、その問題解決がオキナグサ保護への大きな一歩になることが分かった。

午後からは午前中の作業を継続するグループと、オキナグサ保護への政策提案に関して取材を継続するグループに分かれて活動した。後者は、自然保護センターの野上さんに改めて質問する時間を持った他、白山麓の植物に詳しい島田さんへの取材も行った。

午後4時前には翌日の実習生企画イベント『あいラブ白山♡我らジオパーク新聞社』（以下、『ジオパーク新聞社』）について、会場となる白山ろくテーマパーク吉岡園地公園センター内で、公園所長の中村さんと打合せを実施、以上でこの日の活動は終了、吉野工芸の里に戻った。

吉野工芸の里に戻ると、宿泊しているアート&クラフト館の前に段ボール箱が置かれてあり、大量の野菜が入っている。館長の西出さんからの差し入れであった。西出さんは後日も続けて野菜を差し入れて下さり心から感謝している。

さらにこの日の夜、急きょ島田さんが蓮の種を使った炊き込みご飯を作りに来てくれる



写真 6 小村さんへの取材

ことになった。西出さんに差し入れて頂いた野菜も合わせて、実習生は島田さんに調理を習う。島田さんとはそのまま共に夕食のテーブルを囲み、人生談、また白山麓への想いを大いに語って頂いた。

こうして充実した実習二日目は終了。入浴の後は、翌日の『ジオパーク新聞社』実施に向けて最終確認を行った。



写真7 島田さんと実習生の力作、
地元食材をふんだんに使った夕食



写真8 島田さんと食卓を囲む

2-3 8月23日（実習三日目）「白山手取川ジオパーク推進イベントの実施」 ～『あいラブ白山♡我らジオパーク新聞社』実施報告～

執筆：上林真弓

今年度の白山麓実習プロジェクトは、「ジオチーム」（『ジオパーク新聞社』を企画実施するチーム）と「オキナグサチーム」（オキナグサ保護への政策提案を行うチーム）の2チームに分かれて活動した。両チームは、本格的な準備がスタートした7月以降、授業やサークル、アルバイトの時間を縫いミーティングを重ねて実習に挑んだ。

8月23日はジオチームが準備してきたことを形にする集大成の日である。前夜からオキナグサチームも交えて全体ミーティングを行い、ジオチームが企画する『我らジオパーク新聞社』の計画について確認を繰り返した。本番当日の朝、筆者は緊張と楽しみが入り混じった複雑な気持ちであった。この日の天気予報は「昼から雨」。朝からどんよりとした灰色の空模様で、今にも雨が降り出しそうだ。

午前9時前、集合場所の白山ろくテーマパーク吉岡園地に向かう。いざ、出発！

(1)『あいラブ白山♡我らジオパーク新聞社』とは

このイベントは、白山手取川ジオパーク推進協議会主催イベントである3日間の『子どもジオ博士』プログラムの総復習を兼ねて、参加した小学生と実習生が白山手取川ジオパークを紹介する壁新聞を作製するというもの。作製した壁新聞は白山市内の公共施設に順次掲示されることとなっており、これにより白山手取川ジオパークの啓発活動に貢献する。

実施日：8月23日（金）

場所：中宮展示館などジオスポットを経て、
白山ろくテーマパーク吉岡園地公園センターにて実施

対象：白山市内小学生（4～6年生）

(2) タイムスケジュール

タイムスケジュールを役割分担と合わせて述べる。表 1 は双方を示したものであるが、昨年度の実習でも同様の表を作成した。この表を用いてジオパーク推進室や関係者の皆さんとの打ち合わせを行うのである。白山麓実習の後輩たちにはぜひ参考にして欲しい。

2013年度 関西学院大学 総合政策学部 白山麓実習プロジェクト 8月23日(金)タイムスケジュール ～「あいラブ白山の我がらジオパーク新聞社」～									
時間	項目	日比野様	市役所関係者様	野島氏	上林	山本	大槻	他実習生	小学生
9:10	子どもたちと実習生が合流				実習生代表から簡単な挨拶				実習生と合流
10:00	中宮展示館・蛇谷園地			グループ毎の写真を撮影(可能なら)	午後からの活動を見据えて意図的に取り組む				
11:30	濁澄橋				↓	↓	↓	↓	
12:00	綿ヶ滝								
12:30	昼食(吉岡園地)				午後からのグループ単位で昼食をとる				
「あいラブ白山の我がらジオパーク新聞社」開始									
13:00	席に着く・導入	講座準備	チームの補助	Aチーム担当	子どもたちが席に着き次第、導入開始	子どもたちを誘導し、着席させる Bチーム:山本・宇田 Cチーム:大槻・垣内 Dチーム:岡本・白石 Eチーム:武本			チームごとに着席
13:05	日比野様によるミニ講座	日比野様によるお話	↓	カメラマン	Aチーム担当 子どもたちに目を配りながら講座を聴く	子どもたちに目を配りながら講座を聴く			ミニ講座を聴く
13:15	グループで自己紹介・ディスカッション	各チームを回り、子どもたちに激励		メッセージカード完成(新聞作成中に各グループ代表者にコメント記入を順次指示する)	グループで自己紹介・ディスカッション				グループで自己紹介・ディスカッション
13:25	新聞作り開始			各チームはテーマを談定し小学生の関心に合わせディスカッションを行う	新聞作り開始				
14:25	新聞作り終了・発表準備・トイレ休憩			新聞作り終了合図 発表は誰がするのか決める	発表は誰がどのようにするのか決める	新聞作り終了・発表準備・トイレ休憩			
14:30	発表	発表指賞			子どもたちのサポート・発表指賞			発表	
14:45	解散式	日比野様のご提案で行う			各グループリーダーはメッセージカード配布準備			解散式	
14:55	アンケート記入				各グループでアンケート回収			アンケート記入	
15:00	メッセージカード配布・バス見送り		バスに乗る		出口にてメッセージカード配布・バス見送り			バスに乗る	

※上記のタイムスケジュールは2013年8月2日現在のものであり、日比野様と要相談した上で今後の計画の修正に合わせて、随時改訂版を作成致します。

表 1 8月23日 役割分担&スケジュール表

(3) 小学生と実習生が合流

実習生は午後からの活動に必要な荷物を白山ろくテーマパーク吉岡園地の控室に置き、小学生が乗車したバスに乗り込む。小雨がぱらつき始め、筆者は緊張のあまり顔がこわばっていたはずだが、小学生の天使のような笑顔を見て「今日一日絶対に成功させるぞ!」と意気込んだ。バスの座席数に限りがあったために、実習生は午後からのチーム編成を考慮した上で、小学生のいるバスに乗り込むメンバーと野島さんが運転するハイエースに乗車するメンバーに分かれた。なお、ハイエースは小学生が乗るバスの後ろを走った。

バスでは乗車してすぐに筆者が簡単な挨拶を行い、関西学院大学の白山麓実習プロジェクトチームを紹介した。バスの補助席に実習生が座り、近くの小学生と自己紹介を行いながら会話を弾ませた。この時点から小学生のテンションは概ね高く、早くから実習生と打ち解けてくれた小学生が多かったように思う。

(4)中宮展示館見学

ハイエース組の実習生も小学生と合流。少し時間があつたため、ジオパーク推進室の皆さん、小学生と実習生、野島さんがそれぞれ自己紹介をした。

事前に参加者名簿を確認し、午後から行うプログラムのチーム分けを考えていたが、ここではじめて自分が担当する小学生の顔と名前を一致させることが出来た。実習生は午後から活動をともにする小学生と交わることが出来るよう、コミュニケーションを持つことを心がけた。この時点で、小学生の友人関係や個性がある程度分かったため、ジオパーク推進室の日比野剛さんと相談した上で、午後からのチーム編成に若干の変更を加えた。こういった臨機応変な対応は次年度以降同様のイベントを行う上でもポイントになると思う。

小学生は中宮展示館を存分に楽しみ、学習している様子であった。しかし、ここで恐れていた大雨が降り出した。急遽予定を変更し、蛇谷園地見学は中止になる。蛇谷園地は清流で川遊びが楽しめる。「今日は川に入るのを楽しみにして来たのに！」という小学生も数人おり、上がっていたテンションは沈んでしまった。大きな打撃である。ここからの進行がやや不安になったが、こういう事態だからこそ実習生が小学生をリードして、午後からの進行を盛り上げなければ…と思った。



写真 9 中宮展示館にて実習生自己紹介



写真 10 実習生が小学生に教える？

(5)濁澄橋から御仏供杉

安全面を考慮し、綿ヶ滝に行きも中止になる。その代わりにバスは川の旅として濁澄橋、手取峡谷（橋上からの見学）、御仏供杉（おぼけすぎ）を回る。雨で視界が悪かったが、小学生はそれぞれに水の旅、水の力を実感し学習していた。バスの中では小学生と実習生の会話が盛り上がり、仲が深まっていた。



写真 11 手取峡谷を覗く



写真 12 当日の手取峡谷

(6)昼食

白山ろくテーマパーク吉岡園地に戻り、昼食。実習生は小学生に声をかけてグループでまとまる。その後、昼食をとりながら交流を深めた。昼食時も大変賑やかだった。なお、小学生は参加予定人数から1人欠席の18名参加であったためにチーム構成としては基本4人ずつが3グループ、3人ずつが2グループの計5グループの構成となった。また、実習生は1~2人が各グループに参加した。ジオパーク推進室の皆さんにもチーム活動の補助をお願いした。



写真 13 グループに分かれ昼食



写真 14 実習生と昼食を楽しむ小学生

(7)『あいラブ白山♡我らジオパーク新聞社』開始

オリエンテーション

ここからが本格的に実習生が創り上げる時間となる。進行役は山本、大槻、筆者のジオチームが行った。まずは筆者が司会をし、新聞づくりの説明を行う。その後、日比野さんから『子どもジオ博士』過去3日間の振り返り講義をして頂いた。この講義の内容を踏まえて新聞づくりを行うことになる。日比野さんが出題するジオパークに関するクイズに対しても、ほとんどの小学生が正確に回答していた。



写真 15 オリエンテーション全景



写真 16 大きな声で説明する実習生

新聞づくり開始

各チームでディスカッションを行い、新聞づくりに入る。

この新聞のゴールは「ジオパークを白山市のシンボルとしてどのように役立てていくのが良いと考えたのか?」という問いに対し、“答え”を示すことである。

ここで重要になるのは各グループの実習生がどのような方法で小学生をリードするかである。しかし、リードしすぎると実習生が回答することになってしまう。そこで、小学生には出来るだけ自由な発想で新聞づくりに取り組んでもらい、その中でヒントを出しながら“答え”まで導くという方法をとった。

例えば

- ・3日間の中で小学生それぞれが最も印象に残ったことを書き出す
- ・印象的なジオスポットをピックアップして深掘りする
- ・3日間で一番楽しかった日を中心に、日記形式で作製する

など、一旦は小学生に自由に新聞づくりに取り組んでもらう。その後、小学生の興味に関わるヒントやキーワードを提示しながらディスカッションを行い、“答え”を形作っていくという方法である。したがって、今回の新聞づくりは実習生のリードが成功の鍵。そのことを実習生全員が認識し、小学生との新聞づくりに挑んだ。



写真 17 新聞づくり、実習生 1 名グループ



写真 18 新聞づくり、実習生 2 名グループ

発表

予定よりも 10 分程遅れたものの各グループの新聞が完成、発表を開始した。特に男子の多いチームで遅れをとったように感じた（年齢的なものだろうか。男子は実習生の言う事をなかなか聞いてくれない）。発表練習をする予定であったが、その時間はほとんど取れずぶっつけ本番で発表となった。しかし、新聞にはジオパークに対する理解や、自分たちがジオパーク情報の発信のために出来る活動に関して、小学生ならではのアイデアが書かれていた。発表も皆堂々としており、「自信を持って人前で話す練習をして欲しい」という実習生の狙いはあたったように思う。



写真 19 小学生だけで発表



写真 20 実習生と一緒に発表

終了・見送り

日比野さんからの講評があり、小学生にはジオパーク推進室室長の山口隆さんから『子どもジオ博士認定証』が渡された。実習生からはオリジナルメッセージカードを渡した。メッセージカードは、何人かの実習生が新聞づくり中に抜け出し、当日の写真を事前に作成した台紙に貼り付けたものである。これに、実習生それぞれがグループで担当した小学生宛のメッセージを加え、リアルタイムかつ愛情たっぷりのカードを作製した。なお、野島さんには、カメラマンとして写真撮影、現像を担当して貰った。

一緒に写真撮影をするグループ、公園センター内で実習生と走り回って遊ぶグループと色々あったが、小学生と実習生は迎えのバス到着まで別れを惜しんだ。



写真 21 イベント後の集合写真



写真 22 実習生がメッセージカードを渡す



写真 23 メッセージカードを読む小学生

成果（アンケート結果を中心に）

当日は、悪天候のため予定変更をしており、小学生の気分を損ねる場面があった。その意味ではイベントの成功に不安感が付きまどっていた。しかしながら、不安をはね返し、新聞づくりで小学生の気持ちを高めることが出来た。アンケート結果からも満足度の高さが示された（満足度は5段階評価。高い方から5.4の評価のみで100%）。また、後日、筆者が担当したグループの小学生（女子）から感謝の手紙が届いた。今回のイベントを通して、ジオパークや白山市のみならず関西学院大学 総合政策学部にも興味を持ったという内容だった。これは成果の一つといえるだろう。

日比野さんからは「普段はインプットの活動（講義や見学）は行っているが、こうしてアウトプットの活動が出来て良かった」との言葉を頂いた。小学生にとっては“年齢的に身近な大人”になれるのが我々大学生である。他方、大学生は社会的、政策的な視点からイベントを企画し運営する。それを見る小学生は、身近な大人のカッコよさや頼りがい（＝自分もあんなりたい！なれる！）を感じる事が出来たはずであり、そういった大学生への憧れがイベント中、小学生の気持ちを引き寄せたのかもしれない。大学生がイベントを実施する意義を再確認出来た。

加えて、今回は過去の白山麓実習のイベントよりも、長時間に渡って小学生と一緒に過ごした。これにより新聞づくりを行う際にはおおよそ人間関係が出来上がっていたことが

成功要因の一つだったのではないかと考える。半日共に過ごしたことによって小学生と実習生の会話が盛り上がり、その後の本格的な活動も楽しく行うことが出来た。

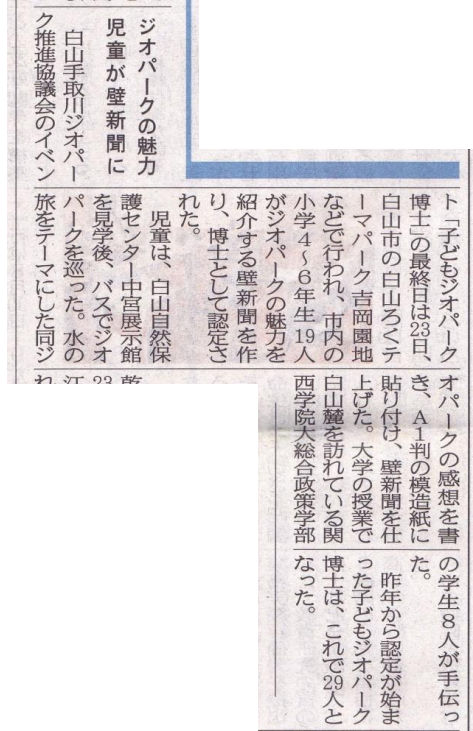
全体を通しての反省点

反省点としては、新聞づくりに時間がかかったことだ。持ち時間 2 時間の中で完成させるのは若干厳しかったかも知れない。また、今後このような小学生を対象にしたイベントを行う際には、男女や人数などのチーム構成に関しても十分な配慮が必要になろう。イベントに参加する小学生を事前に知ることは告知や募集との関係もあるため困難だが、仮想であったとしても早期の段階でシミュレーションを実施しておくことが効果的だと考えられる。

しかしながら、今回のイベントでは限られた時間、また天候に恵まれないという悪条件が重なったものの、実習生全員のリードによって達成度は高かったと考えている（上記アンケートや日比野さんの談話から）。実習生の意気込み、学生の持ち味が十分に発揮された成果ではなかろうか。

今回は過去の実習の中でも長時間に渡って子ども達と一緒にいたことで、新聞づくりをする際にはほぼ人間関係が出来上がっていた。これが大きな成功要因になったと考える。

以上、『あいラブ白山♡我らジオパーク新聞社』の実施報告を終える。



記事 1 2013.8.24 北國新聞朝刊

白山手取川ジオパークの魅力伝える壁新聞を発表する子どもたち＝白山市河内町吉岡で

ジオへの愛 壁新聞に 白山手取川小学生が取材

白山市の白山手取川ジオパークの魅力伝える壁新聞づくりのワークショップ「あいラブ白山我らジオパーク新聞社！」が23日、白山ろくテーマパーク吉岡園地（河内町吉岡）であった。（谷知佳）

白山麓に実習で訪れ 十八人が総仕上げとしている関西学院大総合で取り組んだ。政策学部の子生たち 鳥越小五年の広川彩が、地域貢献の一環で 友里さんのアイデアで企画した。白山手取川 「ジオ博士新聞」と題ジオパーク推進協議会したグループは、ジオが主催するイベントも の生かし方として、白兼ね、海から山までジオ 手取川ジオのキャラオの貴重な地質遺産を クター「ゆきママとし三日間かけて見学した ずくちゃん」をあしら市内の小学四～六年生 った菓子作りやジオ祭

菓子、祭りの提案も

りの開催を提案した。さらに、千代野小四年の平野杏佳さんや東明小四年の安田鈴香さんが、手取川の美しさや力強さを「水はスカイブルー」「大きな岩に穴をあけるなんてすごい」と紹介した。ほかのグループの河内小六年の井口咲さんは、ジオへの思いを「たぐさんの人を知ってもらうのが大切」「すっごくきれいな自然をこわさないようにすればいいと思います」などとしたためた。完成した壁新聞は、市内の公共施設に展示される予定。

記事 2 2013.8.24 北陸中日新聞朝刊

イベント終了後は、後片付けを行い、吉野工芸の里に戻る。

ジオチームにとっては一段落だが、オキナグサチームは明後日の政策提案発表会が本番である。そういうことで、ジオチームは発表練習に勤しむオキナグサチームのメンバーの邪魔をしないよう、ささやかながら乾杯した。

ジオチームのメンバーはもちろん実習生全員で作り上げた8月23日となった。厳しい条件をはね返しての成功に胸を張りたい。また協力して下さった皆さんに心から感謝致します。有難うございました！

2-4 8月24日（実習四日目）「公園ボランティア、其の二」

午前9時に白山ろくテーマパークに到着。前々日と同じく公園ボランティア作業に従事する一日だが、内容としては指定管理者自主事業の補助業務を行う。

都市公園の指定管理者は、日常の管理業務に加えて様々な集客事業を実施しているが、その中でも自主事業は指定管理者の個性が最も表現されるものであり、白山ろくテーマパークを所管する石川県土木部、公園利用者からの評価に大きく影響を与えるものである。この日は、夕方から『キャンドルナイト』と『コンサート』を行う予定で、実習生はその準備を手伝う。

晴れ間が出たかと思えば、雨がぱらつく不安定な天候ではあったが、中村さんはじめ公園スタッフの皆さん、またイベント業者の指示を受けながら実習生は会場設営等に従事し、昼過ぎには一通りの準備を終えることが出来た。



写真 24 屋外にテーブルとパラソルを設置



写真 25 公園来客者へのお土産の菜園内で摘まれた花を使用して作製

なお、土曜日ということで、例によって白山麓実習卒業生の来訪がある。今年度は、東京や関西、北陸で就職した卒業生6名、そして昨年度末に関西学院大学を定年退職され、総合政策学部名誉教授に就任された久野武先生が一泊二日で白山麓入りする。野島さんが昼前にJR小松駅にて出迎え、白山ろくテーマパークに到着したのは昼食時であった。人数が一気に増え騒々しくはなったが、実習生は卒業生の登場に緊張しながら午後からの活動に励んだ。

『キャンドルナイト』の準備が完了してから、一旦吉野工芸の里に戻り、翌日に控えた『政策提案発表会』の準備、リハーサルを行う。オキナグサチーム（政策提案に取り組むチーム）は久野先生の前でプレゼンテーションし、多くのアドバイスを得た。実習生の内3回生は、ほとんど久野先生と面識がないため緊張感を保ってリハーサルが出来た。またジオチームは、前日の『ジオパーク新聞社』の実施報告を行うため、写真のデータ等を整理

した。

この日も西出さんの野菜が届き、卒業生が夕食を作る。実習生への激励と、翌日に控えた『政策提案発表会』に集中させたいという心遣いからだ。久野先生の指導も入り、準備は万端整う。

食後は白山ろくテーマパークに立ち寄り『キャンドルナイト』に参加。キャンドルの美しさは想像以上で多くの人が集まっていた。新しい地域の恒例行事になり、デートスポットとしても認知されそうである。

入浴後は、久野先生、卒業生を含めて大いに親睦を深め、実質的な実習最終日 8 月 25 日を残すのみとなった。



写真 26 キャンドルナイト



写真 27 久野先生、実習卒業生と現役生

2-5 8月25日（実習五日目）「政策提案発表会と懇親会」

今年度実習の目玉の一つ、政策提案発表会当日である。いつも通り午前 9 時に白山ろくテーマパークに入り、会場設営にかかる。日曜日の開催ということで、出席は 50 名程度と予測しシアター形式で椅子を並べる。過去 3 年よりも出席者の人数が多くなる見込みで、今年度は出席者用の長机を設置しないこととした。

会場設営後は発表練習に余念がない実習生だが、この日に白山麓に到着する関西学院大学総合政策学部教授の佐山浩先生を JR 小松駅まで野島さんが迎えに行く。佐山先生は久野先生の後任として今年度関西学院大学に着任され、白山麓実習プロジェクトの責任教員となっている。

佐山先生も加わり、久野先生、卒業生、実習生で昼食をとる。昼食後はいよいよ政策提案発表会である。実習生は練習の賜物か、比較的落ち着いていた。

午後 1 時前、出席者が続々と集まる。実習生はすでにスタンバイ、野島さんは柵岸グリーンサービスの宮腰さんと進行席に座る。

2013 年度の政策提案発表会がはじまる。メインは『白山ろくテーマパークの花壇を活用したオキナグサ保護への提案～住民参加を中心として～』（以下、『オキナグサ保護への提案』）の発表である。

これに先立ち、まず野島さんから出席の皆さんに対し、白山麓実習プロジェクトの意義、

経緯、目的等を伝え導入とした。出席者のおおよそ半数は過去の白山麓実習の活動を知っているが、残り半数は今回の政策提案発表会に出席し、はじめて我々の活動を知った方々である。そういうことで、まずは我々の活動全般について理解を得ることとした。

いよいよ『オキナグサ保護への提案』である。

この提案は、過去3年の白山麓実習を知る地元住民から「盗掘が問題となっている手取峡谷のオキナグサの保護について考えて欲しい」と依頼を受けて挑戦したものだ。実習生は「オキナグサ保護に住民がどう関わるか」を問いとして、その方法を探るべく、これまで自然保護センター担当専門員の野上さんから講義や情報提供を頂くと共に、かわち山草会の小村さん、染色作家の島田さんはじめ公園ボランティアで指導頂いたシルバーさんなど、地元の関係者への取材を行い提案をまとめてきた。この取材の過程で浮き彫りとなったのは、自生地をめぐる行政と住民の間の「不信」と「不満」であった。自然保護センターは、住民に対し「峡谷に降りて不審な行動をしている人を見かけたら通報して欲しい」としながらも「盗掘リスクを増幅するため自生地自体は教えられない」との立場である。一方で住民は「自生地を教えてくれればパトロールしやすい。教えられないと言うのは住民を信頼していないからか」と不満を露わにする。こうした双方の立場の違いに苦悩しながらも、実習生が次の通り提案をまとめた。

まず、白山ろくテーマパーク内の花壇にオキナグサを移植する。これは既に部分的に実施されているが、この花壇のオキナグサを使用して自然保護センターの野上さんらが住民にオキナグサ保護に関する講義、指導を行う。これにより住民はオキナグサや関係法令について知識を得、同時に自然保護センターは住民の知識習得度を把握することが出来る。オキナグサ保護についての知識習得が確認された住民には、自然保護センターが「オキナグサ・マイスター」に認定する。さらにマイスターになった住民は、自然保護センターと協働して花壇のオキナグサを活かすべくイベント等の活動を展開する。その後、一定期間活動に参加した住民には、自生地を伝え、積極的にパトロールに参加してもらうというシステムの導入を提案した（オキナグサ・マイスター制度）。



写真 28 野島さんの発表会導入部分



写真 29 白山ろくテーマパーク花壇に移植されたオキナグサ



写真 30 『オキナグサ保護への提案』発表中

次に、

◇花壇のオキナグサを環境教育の教材として利用すること

◇花壇で増殖した場合、苗を販売、希少価値を低下させて盗掘リスクを減退させること

◇上記の販売収益をオキナグサ保護活動や公園内への移植、育成費に充当すること

などを発表した。これらの取組み、活動をマイスターに認定された住民が中心になって行うのだ。

『オキナグサ保護への提案』については、本紙末に加えた資料集のスライドが詳しいため、そちらを参照頂きたい。

発表会には、自然保護センター職員や白山市のジオパーク推進室職員、白山ろくテーマパーク職員、金沢庭材(株)社員、さらに地元住民らが集まっていた。質疑応答では、手取峡谷に近い地区長が自然保護センター職員を前に「信頼していないのか」と発言、これを実習生がフォローする一幕もあった。しかし、発表会後の懇親会では自然保護センター職員と地区長、市民団体の代表者が談笑する場面が見られ、その意味では、今回の政策提案発表は行政・住民間の距離を縮めるきっかけになったのではないだろうか。なお、実習を終えて帰阪した後、自然保護センターから「(学生が提案した)マイスター制度導入に向けて検討に入る。今後も協力して欲しい」とメールがあった。実習生の提案が実現するという事は素晴らしいが、これにより来年度も白山麓実習は手取峡谷のオキナグサ保護に関わることとなった。より実社会に近いところで活動できることに感謝しつつ、責任感を持って臨まなければならない。

『オキナグサ保護への提案』のあとは、二日前に行われた『ジオパーク新聞社』の実施報告である。ここでは、実際に小学生が作ったポスターを展示しつつ、主に写真を使って発表を行った。白山麓実習が企画するイベントは、これまでも子ども向けのものが多いため、政策提案発表会の出席者のほとんどは直接的な関わりが無い。そうした新鮮さ故か、熱心に聞き入る方が多かった。

発表の後の質疑応答では、ジオパーク推進室の日比野さんがオキナグサをジオパーク内の貴重な自然遺産と捉え、

ジオの側面からの関わり方について言及した。確かに、手取峡谷に近い吉岡地区等の住民にとってオキナグサ保護は関心の高いテーマであるだけに、こうした問題とジオとの関係性を示すことが出来れば、ジオパークにとっても新たな啓発の形が見出せるかもしれない。白山市統合のシンボルでもある白山手取川ジオパークを、あえて狭い単位での地区における関心事項とリンクさせ啓発活動を展開するというのも考えて良いのではないだろうか。

また、住民からは「来年度はジオパークと“食”を繋ぐような活動をお願いしたい」といった要望が伝えられた。自然豊かな山麓に住む子ども達は身近にジオを感じる事が出来るが、平野の住宅地に住む子ども達はそうはいかない。しかし、“食”とジオとの関係を学べば、平野の子ども達にも容易にジオを感じてもらえるのではないかと…ということである。この案について、来年度は地元の主婦の皆さんが協力を惜しまないとのこと。ここに学生がどんな計画を持ち込むか、楽しみである。

実習生の発表が終わり、石川県からは自然保護センターの野上さん、白山市からはジオパーク推進室室長の山口さん、指定管理者を代表して(株)岸グリーンサービス業務部次長の山下義光さんの順に講評を頂く。また佐山先生が謝辞を述べた。

野上さんからは提案に対する評価もさることながら、今後オキナグサ保護への住民参加



写真 31 『ジオパーク新聞社』実施報告

を推進していきたい旨が示唆された。特に一定の条件を満たした場合、住民にも自生地を教示する可能性について言及された点は、提案の核心を受入れて頂いたようであった。

山口さんからは、「(白山麓実習は) 学生の持ち味が発揮されている」という話があった。一般的なイベントでも学生が運営すると華やかに、また明るくなる。まして子ども向けのイベントであれば尚のことである。地域活性化と学生、ジオパーク推進と学生、双方の面で学生のパワーがもたらすプラスの要素が大きいことは過去の実習でも証明されているし、今後も白山麓実習を継続、発展させることで引き続き地域の活性化に貢献してもらいたいとのことだった。

山下さんは、実習全体に対する感想ならびに都市公園の指定管理者として、ジオパークはじめ地域活性化等の公益確保に努めたい旨を述べられた。白山麓実習については4年間継続してきた点を評価頂いたとともに、今後の活動への激励を頂いた。



住民の積極的な参加など

オキナグサ保護へ政策提案

関西学院大学総合政策学部白山麓実習プロジェクトチームは25日、白山市の白山ろくテマパークで、白山麓のオキナグサ保護に関する「政策提案発表会」を開催した。

この発表会は、今年で4年目となる白山麓実習(5泊6日)の二環。今年度は「白山ろくテマパークの花壇を活用したオキナグサ保護への提案」を住民参加を中心として「」を題目に発表が行われた。会場には石川県白山自然保護センター、白山市観光推進部、ジオパーク推進室職員のほか、白山ろくテマパーク指定管理者の岸グリーンサービス、白山麓実習を援助している金沢庭材の社員ら約50人が集まった。手取峽谷のオキナグサ

記事 3 2013.8.28 北陸建設工業新聞朝刊

は、13年現在163株が確認(石川県自然保護センターによる)されているが、一部の愛好家らによる盗掘が度々問題となってきた。石川県では「ふるさと石川の環境を守り育てる条例」に基づき、盗掘への罰則規定を設けているものの、自生地近くの住民がオキナグサ保護にどのように取り組むかが今後の課題になっている。

意見交換では、「オキナグサの自生地が公表されれば、住民が積極的にパトロールに参加でき

る」や「ジオパーク推進の一環としても、オキナグサ保護に取り組むべき」などといった意見が出され、議論を交わした。学生の指導は、関西学院大学総合政策研究科リサーチ・コンソーシアム(産官学民研究協力機構)に所属する野島章吾氏(クロス・クリエイティブ・コア)が行い、石川県自然保護センターや金沢庭材が協力した。野島氏は「このプロジェクトがモデルケースとなり、様々な学生活動を白山麓に誘致出来れば、『学生が集う白山麓』という新たな魅力の創出が期待できる」と話していた。

発表会の後は、関係者が集まって恒例の懇親会である。場所を、吉岡園地から吉野園地のバーベキュー(以下BBQ)場に移して行く。なお、食材は岸グリーンサービス、飲料は金沢庭材(株)の皆さんに差し入れて頂いた。懇親会も例年よりも参加者が多く、3つのBBQサイトが満席の状態だった。時間は決して長くはないが、久野先生の乾杯の発声があり、各サイトが実習、ジオパーク、オキナグサ、白山麓の活性化等を話題に盛り上がった。

また、『ジオパーク新聞社』に参加した小学生が飛び入りで懇親会に加わった他、実習卒業生が多数BBQに参加した。卒業生からは「白山麓は第二の故郷」との公言があり、現地の関係者の皆さんは大いに喜んでいて、この実習で白山麓を知り、白山麓への愛情を育んだ卒業生の存在には、野島さんが「励まされているし、感謝している」とも話していた。

宴たけなわとなり、懇親会の最後には実習生が順番にお礼の言葉を述べた。3回生からは次年度以降に向けた力強いメッセージが伝えられ、白山麓実習のさらなる飛躍が予感された。4回生からは、白山麓実習プロジェクトチームに加入してからの2年間で学んだことと感謝の気持ちが伝えられた。4回生は3名中2名が編入生で、関西学院大学に編入してからの2年間、この実習を中心に過ごしてきたといっても過言ではない。また4回生の3名はそれぞれ異なるゼミに所属している。久野ゼミから佐山ゼミへと実習の中心が移る中で、この両ゼミに所属していない4回生がチームを運営するのは並大抵のことではなかったはずだ。その苦勞と成長の軌跡が伝わってくる上林、武本、岡本のお礼の言葉であった。



写真 32 政策提案発表会後 ジオパーク推進室職員、白山ろくテーマパーク関係者の皆さん、久野先生、佐山先生、卒業生と



写真 33 BBQ サイト i 山口さん、野上さん、小村さん、久野先生、卒業生と



写真 34 BBQ サイト ii 日比野さん、上田さん（金沢庭材㈱代表取締役）、山本さん（同社員）、島田さん、『ジオパーク新聞社』に参加した子ども、佐山先生、卒業生と



写真 35 BBQ サイト iii 宮腰さん、中村さん、小野寺さん（金沢庭材㈱社員）、西東さん（ツナグ白山麓）卒業生と



写真 36 実習生を代表して上林が謝辞



写真 37 大隅冴子さん（ツナグ白山麓理事）から卒業生を代表してメッセージ

久野先生と卒業生は懇親会の後、白山麓をあとにした。久野先生はさらに北上し信州に向かう予定である。多忙な中で参加頂き、実習生は多くのアドバイスを頂戴した。卒業生も翌日から仕事という中で遠方から参加してくれた。感謝に堪えない。

懇親会と後片付けを終え、吉野工芸の里に戻る。全員疲れ切った様子であるが、いつも通りめもと岩温泉に向かう。職員さんには発表会にも出席頂いた。お礼を伝え、最終日の入浴となった。宿舎に帰ってからは佐山先生を含めささやかながら打ち上げを行い就寝となった。

2-6 8月26日（実習最終日）「帰阪」

午前10時、吉野工芸の里を出発する。東京方面へ向かう佐山先生ら一部実習生はここで別れたが、大半は帰阪する。

帰阪組は、白山スーパー林道から白川郷を抜けて関西を目指す。瀬女高原、尾口村を通り、スーパー林道へ。実習生はダイナミックな峡谷の景観に驚きの声を上げる。実習でここを訪れるのは2年ぶりで、実習1期生、2期生も同じように感動していたとのこと。しかし、残念ながらこの日のスーパー林道は先の大雨により岐阜県側に危険箇所があり通り抜けが出来なかった。したがって県境地点（標高1,450m）まで行き、引き返すこととした。

平野部まで下った頃には車内の実習生のほとんどが疲労で眠っていた。そこで昼食は少し元気が出る場所だと野島さん。東尋坊に向かう。東尋坊近くで目を覚ました実習生は夏の海原に癒されたようで、東尋坊を観光、同地で海鮮丼などを食べた。なお、ここでは白山麓実習プロジェクトチームの新体制が発表され、3回生の山本を中心として次年度の実習に臨むことを確認した。

昼食後は一路京都を目指す。スーパー林道の通行止めの影響で1時間程予定より遅れたが午後7時、京都駅前が無事解散、今年度の白山麓実習も大団円となった。

3. 次年度の展望

執筆：野島章吾

3-1 白山手取川ジオパーク推進協議会との連携～イベントの実施効果向上のために～

昨年、今年と白山手取川ジオパーク推進に寄与すべく実習生はイベントを企画した。確かに各イベントは学生が持ち味を発揮し、参加した小学生には十分に楽しんで貰うことが出来たと思う（アンケート）。しかし、イベントの限界についても検証する必要があるだろう。

例えば「イベントの成果はどれくらい継続するのか？」という点である。昨年の『白峰探検隊』も、今年の『ジオパーク新聞社』も、イベント実施から時間を経ない内は参加した小学生にとって印象深いものになっていると考えられる。それでも時間が経つにつれて印象は薄れるものであり、イベントの成果、すなわち「故郷の良さ」「ジオの楽しさ」といった地域への愛情も次第に薄まると考えるべきであろう。

今年、政策提案発表会には白山麓河内地区に住む小学生の姿があった。彼は2日前の『ジオパーク新聞社』にも参加していたわけだが、そんな彼が政策提案発表会にも参加出来たのは会場が河内地区にある白山ろくテーマパークだったからである（会場までは自転車）。しかし、平野部の小学生や、同じ白山麓でも白峰や尾口といった地区から白山ろくテーマパークは遠い。当然、小学生が自力で訪れるにはハードルが高い。これは自分が住んでいる近くにジオスポットが無い場合、小学生の足ではジオに触れ合う機会が少ないことを示している。

もちろん、白山市内には平野部から山麓部までジオスポットは点在しているし、文化や歴史、何より市内を流れる手取川の水の旅こそがジオのテーマである。それでも白山市の面積は広い。高学年であればまだしも、小学生低学年の足をもって、物理的なジオの見所と日常触れ合うのは住んでいる場所によっては困難と言わざるを得ない。

では、イベントを実施した後も日常的、定期的にジオと触れ合う機会を小学生に提供するためにはどのような方法が考えられるか。

第一にはイベントそのものに“日常要素”を加えることである。前章でも述べたが、今年度の実習中「ジオパークと食を繋げるイベントを実施して欲しい」という地元住民からの要望があった。簡単に説明すると次の通りだ。

大地（＝ジオ）の恵みである食材について子ども達の理解を深める。これら食材の中でも日常的に食されるものを厳選し、例えば『ジオ弁当』を子ども達に考えて貰い、実際に作る。それを各家庭に持ち帰って食べるもよし、弁当はイベント中に食べてしまい、残った食材を御土産にするというやり方もある。家庭に戻ってからも、イベントで使用した食材を目にする度にジオを思い出す…といった具合である。このようにイベント後も出来る限り「自分達の生活がジオの恵みの上に成り立っている」ことを感じる仕掛けづくりが重要であるし、それが故郷への愛情を育む要因にもなるだろう。

第二に、イベントのカリキュラム化、恒例化を考えるということである。今年度の『ジオパーク新聞社』は、白山手取川ジオパーク推進協議会が主催するイベント『子どもジオ博士』の最終日に導入された。『子どもジオ博士』は、小学生の夏休みを利用した合計3日間のカリキュラムだが、このように数日間に渡って実施するカリキュラム型のイベントであれば、参加した小学生間の友人関係が構築され、イベント終了後も交友が続くことが期待される。とすれば、その交友の中でジオを思い出す機会もあろう。しかし、単発のイベントでは小学生同士の友人関係を構築するところまではまず辿り付けない。そこで、期間、予算が限られた実習の中では難しいかもしれないが、今後は実習生にカリキュラム型のイ

イベントの端緒となるような企画を考えて貰いたい。

また、白山麓実習のジオパーク推進イベントを、白山手取川ジオパーク推進協議会の年度の恒例行事に位置付けるということは考えられないだろうか。小学校は6学年在籍するわけで、仮に白山麓実習プロジェクトが小学生の全学年対象イベントを6年連続して実施したとすれば、一人の小学生が最大6回参加出来ることになる。ある意味、お祭りのような位置づけである。こうすることで低学年時にイベントに参加した小学生が毎年参加するようになれば、定期的にジオと触れ合うことになり、故郷への愛情をより大きく育むことが可能ではないか。

来年度は、ジオパーク推進イベントに“日常要素”を加えるというところから始めたい。その結果を踏まえて、イベントのカリキュラム化や恒例化に向けて、ジオパーク推進室をはじめ白山手取川ジオパーク推進協議会との連携強化を図りたいと考えている。

3-2 白山ろくテーマパークとの連携

白山ろくテーマパークとの連携は、白山麓実習の歴史そのものである。初年度の政策提案発表会をスタートとして、白山麓実習はその活動の選択肢を拡大させてきた。現在の白山麓実習があるのも白山ろくテーマパークの関係者の皆さんに支えられてきたことが極めて大きい。

とりわけ前指定管理者時代から現在も公園所長を務める中村さんからは一方ならぬ理解と協力を頂いてきた。白山麓実習だけでなく実習卒業生が中心となって立ち上げた市民団体ツナグ白山麓を通して何かしら恩返ししていきたい。それはやはり白山ろくテーマパークを応援するということになるのだと思う。

来年度は指定管理期間3年の最終年ということで、宮腰さん、中村さんをはじめ公園スタッフの皆さんは大変なご苦勞をされる。そういう中で白山麓実習を受入れて頂くということには実習生一同、感謝と責任を感じなければならない。その責任感をもって、なるべくスタッフの皆さんの負担にならないよう、かつ公園の活性化に貢献できる活動を展開したいと考えている。具体的には、白山ろくテーマパークからの白山手取川ジオパーク推進を強化することだ。白山ろくテーマパークは石川県の都市公園とはいえ、その所在は白山市内、白山麓にあり、当地の政策目標であるジオパーク推進への貢献が都市公園としての価値を高めることは疑いようがない。しかも、白山手取川ジオパークは白山市統合のシンボルとして市内全域が指定されている。すなわち白山ろくテーマパークがジオパークの中で重要な拠点として位置付けられれば、白山市内全域から市民（＝県民）の利用が見込まれ、これは広域公園^⑤としての役割を果たすことにもつながる。さらに白山ろくテーマパーク吉野園地には、BBQ場、オートキャンプ場が設置されており、その集客についてもジオパーク推進と連携すべきであろう。というのも、白山市のジオパーク推進室は同市の観光推進部内の組織であり、白山手取川ジオパーク推進協議会にも地元観光協会等が多数参加している。また、白山市に関連する情報がFacebook上で頻繁に更新されているが、ここでもジオパークに関する内容が多い。白山ろくテーマパークとしては、ジオパークを起爆剤とする様々な観光推進活動と連携しない手はなく、ジオパークと白山ろくテーマパークの集客相乗効果を高めるシステムを模索すべきであろう。筆者をはじめ白山麓実習プロジェクトは、

^⑤都市公園の種類の一つに大規模公園があり、その大規模公園の分類の一つが広域公園である。主として一の市町村の区域を越えて広域のレクリエーション需要を充足することを目的とする公園で、地域生活圏等広域的なブロック単位ごとに一箇所当たり面積50ha以上を標準として配置する。（国土交通省ホームページ都市局公園緑地・景観課
http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/p_toshi/syurui/ 2013.11.14 閲覧）

この点についても具体的かつ実践的な提案を行い、白山ろくテーマパークの活性化に貢献していかなければならず、それをもって僅かでも恩返ししたいと考えている。

3-3 吉野工芸の里との連携

今年度の実習でははじめて吉野工芸の里に宿泊した。同施設を運営する白山吉野地域振興協議会の会長を務める西出さんに手配頂いたお陰である。吉野工芸の里は、西出さんだけでなく、島田さんが作家として所属しており、白山麓実習は初年度から多くの支援を頂いてきた。心から感謝している。

今年度は実習期間を通して西出さんに野菜等の食材を差し入れて頂き、島田さんには二日目の夕食を作って頂くといった心遣いを頂戴した。今年度から実習に参加した3回生は温かい歓迎に感動したようで、先輩の拓いた道に想いを馳せ、実習に取り組む気持ちをいっそう引き締めていた。

来年度の実習については未定な点が多いが、吉野工芸の里との連携事業は何かしら導入したいと考えている。作家の皆さんとの交流会や、施設そのもののプロデュース案、あるいはジオパーク推進への貢献手法などを考えていきたい。

宿泊に関して、今年度は全日程で白山ろくテーマパークを活動拠点としたため、至近距離に位置する吉野工芸の里を利用できたことは非常に効率が良かった。移動距離が短く、時間、燃料代を節約でき、リスクも軽減出来た。一方で、昨年は白山登山や白峰地区でも活動している。昨年の例を踏まえると今年のように白山ろくテーマパークのみを活動拠点にするといったケースは今後稀であろう。したがって、次年度以降は白山ろくテーマパークでの活動期間と、その他の場所で活動する期間との調整を前提に、吉野工芸の里を利用させて頂けると幸いに思う。

3-4 市民団体ツナグ白山麓との連携

今年度の大きな変化として、4月に市民団体ツナグ白山麓が発足し、当該団体との連携をもって実習を行ったことがあげられる。ツナグ白山麓は、白山麓実習の卒業生を中心として、久野ゼミの卒業生や白山麓の支援者を加え、白山麓実習はもちろん様々な学生生活を白山麓に誘致、支援することを目的に発足した団体である。なお筆者は当該団体の共同代表の任についている。

まだ発足後1年に満たない団体ではあるが、今後は関西の大学を中心に広報活動を展開し、1件ずつ白山麓における学生生活を増やしていきたい。その際、モデルとして白山麓実習を紹介することで、同様の学生生活を生み出すだけでなく、白山麓実習自体の認知も高めたいと考えている。

以下はツナグ白山麓 Facebook ページからの引用である。中期的な運営目標を示す。

「ツナはく」のこれから…

皆さん、共同代表の野島です。ツナグ白山麓＝「ツナはく」は発足して一カ月になりました。そんなわけで第一回総会の日程も7月6日に決まり、おおよそ30人くらいの関係者の皆さんに参加して頂ける運びとなりました。場所等未定ですので、改めてメールでご案内させていただきます。

さて、「ツナはく」ですが、中期的な目標として、第一に今年4年目を迎えている関西学院大学の『白山麓実習プロジェクト』を応援していきます。

継続は力なりーの通り、今年は地元住民の皆さんから、県指定希少植物「おきな草」の保護活動への参加と、住民参加による移植育成システムを提案して欲しいという要望が届いています。新聞紙面でも取り上げられているおきな草盗掘の問題解決に向けて、実習生がどのような活動を展開するか、とても楽しみです。

また、昨年からは白山手取川ジオパーク構想推進協議会（白山市観光推進部ジオパーク推進室）と…連携し、ジオパーク構想の政策課題である「白山市民の共有意識の醸成」に貢献すべく活動しています。昨年は白峰地区でワークショップ「始動！白峰探検隊☆」を実施し、平野部の子供たちに白山麓の魅力を知って貰おうと活動しましたが、今年はジオパーク推進室のイベント「子供ジオ博士」とタイアップし、実習生と子供たちが一緒になってジオパークの活用方法を考えます。

おきな草、ジオ、ともに実習生の提案や活動については8月25日の日曜、白山ろくテーマパーク内にて、地元自治体職員、企業、市民団体、住民等の皆さんの前で発表します。例年にも増して活気ある発表会が出来ればと思っています。

中期目標の第二は、『白山麓実習プロジェクト』を例として、新たな学生活動を白山麓に誘致することです。実際に誘致活動を行うのは私ですが、数年のうちに何らかの新しい学生活動を白山麓に誘致、内容によって「ツナはく」でその活動を応援していきます。

白山市は補助金制度を使ってまでこうした学生活動を誘致しようと取り組んでいます。単に観光客を集める以上に、まとまった人数、まとまった泊数が期待できる学生活動は地域活性化への貢献度が大きいからです。同時に、若い学生の活動が地域に元気をもたらし、地元の皆さんから熱烈に歓迎される事は白山麓実習が証明して来ました。こうした学生活動を一つでも増やすことに、「ツナはく」は貢献したいと考えています。

まずは、これらの中期目標を達成し、その後の第二期目標を定めて進む・・・というのが「ツナはく」のスタイルです。時代の変化とともに、地元から求められるモノは変わっていきます。そうした要望に柔軟に応えながら、地元と一緒にあって白山麓を盛り上げていきたいと思っています！

皆さん、どうぞ宜しくお願い致します!!

（市民団体ツナグ白山麓 Facebook ページ 2013. 4. 30 書き込みより）

3-5 リサーチ・コンソーシアム協賛事業として

関西学院大学 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアムは、同研究科が産官民学研究協力機構として主催している。今年度、白山麓実習はリサーチ・コンソーシアムの協賛事業となった。それによる利点は実習生には分かりにくいかもしれない。ただ、筆者、また実習

を後援する金沢庭材㈱の利点は少なくない。

これまでの白山麓実習は久野ゼミの実習だったが、昨年からゼミ横断型で実施されている。さらに今年度は久野ゼミから後継の佐山ゼミに中核を移しており、白山麓実習の明確な位置付けが必要となっていた。というのも、例えば新聞社からの取材に応える際、ゼミ実習ともいえない、学部の授業とも言えないでは説明がつかない。そうした中でリサーチ・コンソーシアム協賛事業と名乗れるようになった事でずいぶん伝達がしやすくなった。また、リサーチ・コンソーシアムは産官民学の研究協力を目的としているため、金沢庭材㈱としても実習を後援する立場にあると、第三者への説明が容易である。

上記の他、リサーチ・コンソーシアム事務局（総合政策学部事務室 課長）の石原誠さんのサポートが有難い。リサーチ・コンソーシアム協賛事業となったことで、白山麓実習プロジェクトを運営するにあたり大学事務室のどなたを頼れば良いのか、この点が明確になった。昨年までは久野先生経由で事務室と連携を取っていたが、今年度は筆者が直接事務室に依頼事を連絡出来るようになり、その意味では白山麓実習を媒介に、筆者が所属する金沢庭材グループと総合政策学部の距離が縮まったように思う。一つの産学連携の形態が築けたと考えている。

4. 総括

中小企業経営者の立場から見る白山麓実習

執筆：野島章吾

前章までで述べた通り、白山麓実習プロジェクトは、石川県、白山市、企業、市民団体、住民、学生が連携して実施している。

最後に、企業人の立場、また中小企業経営者の視点から、筆者が考える産官民学連携の在り方について述べる。これをもって今後の白山麓実習プロジェクトの進路を示すことしたい。

産官民学連携においては、企業、自治体、住民、大学それぞれの役割や関わり方を考えていく必要がある。しかしながら、企業の役割を捉えることには多少の困難が伴う。自治体や大学にも多様な形態があるし、もちろん住民は様々な価値観を持つ集合体である。それでも自治体や大学のそれと比べ、企業の在り様、組織体、法人としての行動目的や狙いはより複雑だ。また住民も様々な価値観の集合体とはいえ、産官民学連携のような取り組みに加わる時点で、比較的参画意識、自治意識が強い住民が集まっていると考えるべきで、その意味では一定の共通点が見られよう。

例えば企業は、大企業、中小企業という規模、業種や業態などの違いがあり、またグループ経営を展開する場合なども含めての組織、志向や戦略戦術は各社まったく異なる。したがって、これらの企業と自治体や大学が連携を模索するならば、その方法は画一的であってはならない。大企業であれば組織力や豊富な人材を活用し、自治体や大学が用意したパッケージに参加するといった形をとれるだろうが、中小企業は、組織力、人材とも大企業ほどの持ち合せがなく、大企業と同じように大学や自治体が発したパッケージに参加出来るわけではない。それでも国内の中小企業の割合は全企業中 99.7%、雇用者数では 7 割弱を占める。内、小規模企業（中小企業よりも小規模）は全企業中 87.0%、雇用者数の 2 割である^⑥。すなわち、いくら産官民学連携を謳ったとしても、それが大企業のみとの連携を前提にしているのであれば社会の実像を見失い兼ねないのだ。理数系の分野であれば、大企業が研究費用を捻出し、そこから商品開発を目的とした産官学連携事業が行われる。しかし、人文系の分野であれば、人の営みに関係する研究や活動での連携が多くなるはずで、社会の実像を踏まえなければ“世間の感覚”からかけ離れた答えや成果しか導き出せない恐れがある。ゆえに中小企業を交えた産官民学連携の体制構築は、本来重視されるべきテーマといえよう。

では、どのようにして中小企業を交えての産官民学連携を構築するか。先に述べた通り、大企業の如き組織力、人材を有していない中小企業では対応の幅が限られる。ゆえに大学側は中小企業との連携を敬遠、断念してしまいがちだ。そこで提案したいのは、中小企業での実習、つまりインターンシップを実施することである。中小企業と大学、自治体が連携して、中小企業でインターンシップを行うのである。

仮に中小企業で大学生がインターンシップを実施したならば、その過程で知る社会の実像（生の企業経営、仕事の厳しさ…）は、就職活動はもちろん社会人になってからも十分に活かすことが出来る。他方、現実的な視点を養うことは研究活動にもメリットがあり、政策学部であればより実効性の高い政策立案力を身に付けることに繋がるのではないだろうか。大学は最高学府であり、その研究レベルの高さは疑いようがない。だからこそ、社

^⑥ 中小企業庁統計（総務省「平成 21 年経済センサス基礎調査」再編加工）

http://www.chusho.meti.go.jp/koukai/chousa/chu_placement/index.htm 2013.10.30 閲覧

会の実像を捉えた上で研究活動を行って貰いたいと思う。

また、中小企業側も、インターンシップであれば受け入れ可能というケースが多いものと考えられる。それどころか中小企業は学生の知識や技術（パソコンスキル等は最たるもの）、自社に対する感覚的評価を必要としている場合もあろう。共同研究や共同調査といったことになると、中小企業は「学生と一緒に何をしたらいいかわからない」「学生の研究テーマと合わせられない」となる。しかし、インターンシップのように、仕事体験、職場体験であれば受け入れのハードルはかなり低くなるはずである。しかも、ほとんどの中小企業はインターンシップに来た学生を採用したいとまでは考えない（新規学卒者採用は毎年行うわけではないため）。したがって終始リアリティを保ったインターンシップの展開が期待されるのだ。

白山麓実習は、指定管理者や、その支援企業（概ね中小企業）を受入先として、石川県や白山市、または吉野工芸の里をはじめ複数の公共施設と連携しながら実習を行う。中小企業の仕事現場を見つつ、行政の仕事の現場も知ることが出来る点が白山麓実習の特徴だ。そういうことで、筆者としては白山麓実習をインターンシップとしての位置付けからも価値を高められるよう、今後注力していきたいと考えている。

近年、多くの大企業がインターンシップを取り入れており、その数は年々増加している。インターンシップは就職活動の際に企業と大学生のミスマッチを可能な限り避けるため、就職前に会社に入って仕事を体験することであるが、これについて複数の人事担当者と話したことがある（いずれも大企業）。

A社では「インターンシップに来る学生には前向きな仕事しか教えない」と言う。“前向きな仕事”とは、努力することで成果が上がりやすい仕事のことだそう。そういった成功体験をインターンシップで得て、自信を持って就職活動に臨んでほしいとのことである。

B社は「インターンシップに参加している学生は（当社への）就職志望度が高いものと見なします」ということで、すでに採用活動の一環としている。そこでは“体験”よりも“採用”に重点を置いており、本来のインターンシップの目的とは異なる。ちなみにB社は「他社のインターンシップに参加した学生は（当社への）志望は低いと考える」とも語る。

最後に、C社の担当者は「現場社員には学生が辛いと感じる仕事の話もするように」と指示しているそう。同時に「（当社には）入りたくないと思うようなことまでは言わないように」とも指示するのだという。学生に「この会社の社員さんは正直に話してくれている」と思い込ませ、かつ企業イメージを損ねないようにすること（学生の企業評価向上）が狙いらしい。

もちろん本来の目的に沿ってインターンシップを実施している会社も多い。しかし、2013年10月29日に厚生労働省が発表した「新規学卒者の離職状況」で以下の結果が示された。

『2010年3月に大学を卒業して就職した36万5,500人のうち、3年以内に退職したのは11万3,390人。離職率は、前年度より2.2%増の31.0%。このうち、1年目の離職は4万5,864人、2年目の離職は3万6,508人、3年目の離職は3万1,018人。

この他の新規学卒者の3年以内離職率は、短大等卒者が39.9%（前年度比0.6%増）、高卒者が39.2%（前年度比3.5%増）、中卒者が62.1%（前年度比2.1%減）。中卒者以外はすべて前年度より上昇。』^⑦

離職率の増減はインターンシップの効果と直接因果関係があるわけではない。しかし、増加するインターンシップが「学生時代に仕事のことを知ってもらい企業とのミスマッチを減らす」という狙いに基づいて行われているとすれば、その成果は十分に検証されるべ

^⑦ 厚生労働省 若者雇用関連データ（2013.10.29発表）

<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/12.html>（2013.10.29閲覧）

きであろう。そうでなければ上記談話に統計を合わせ、インターンシップそのものの意義を疑わざるを得ない。インターンシップだけでなく、ビジネスコンテストやオープンセミナーにも、協賛企業、実施企業の意図がある。その意図を正確に掴んだ上で参加することが大切である。そのためにも学生には社会の実像を積極的に学んでもらいたい。“踊らされない学生”になってほしいと思う。

中小企業経営者として筆者にも理想や目標がある。決して現実に不貞腐れているわけではない。しかし、理想や目標を達成するためにこそ、現実を知り、社会の実像、実態を直視すべきだと考えている。

白山麓実習は来年5年目を迎える。実習生には、中小企業と自治体との協働、中小企業と住民との連携に加わることを通して、出来る限り社会の実像を学んで欲しいと思っている。同時に、実習生には当事者意識を持って取り組んで貰いたい。これを無くして実習から学びを得ることは出来ないからだ。社会の実像ともなれば尚更である。

最後に、筆者個人はツナグ白山麓が目指す「白山麓への新しい学生活動の誘致」にも取り組む。関西学院大学の白山麓実習をモデルとして、指定管理者制度をはじめとした官民協働の現場に、市民団体と中小企業共催のインターンシップ・プログラムを導入したい。新しい学生活動を白山麓に誘致するのだ。そこから白山麓地域の活性化に貢献できれば幸いである。

—おわりに—

上林真弓

これで実習報告を終わります。ご支援を頂いた全ての方々に深く御礼申し上げます。

筆者は関西学院大学に3年次編入し、この実習に縁があり参加させて頂きました。

白山麓実習は、以前は久野ゼミの実習として活動していました。しかし、久野先生が定年ご退官ということでゼミがなくなることに…。そこで実習生を学部全体から募集していたのが筆者の一学年上の先輩方。そこで、この実習に出会ったのです。

国際問題に関心があり、その勉強や活動をしていた中で総合政策学部のモットーである「Think globally, Act locally」の言葉に強く共感しました。ずっと海外ばかりに目を向けていましたが、その際に気付いたのは日本国内を知らない自分の姿でした。この実習では、まさに「Act locally」の視点で様々な現場関係者の方々に近づいて活動します。学生時代にこのような経験が出来たことは、自分に大きな影響をもたらしたと思っています。人—自然—動物などのつながりが、白山麓そしてジオパークには凝縮されていて、日本の大切な宝物なのだと感じました。総合政策の学びの栄養も、実習を通して多く摂り入れることが出来ました。

実習中、白山麓の皆さんは関西から来た私たちを温かく迎えて下さいました。

宿舎となった吉野工芸の里では、手作りの野菜で、手作りの料理を振る舞って頂きました。実習を通して様々なアドバイスも頂戴し、人生の指針になるようなお話も聞かせて頂きました。西出さん、島田さん、有難うございました。

白山市観光推進部ジオパーク推進室の山口さん、日比野さんはじめ職員の皆さんは、昨年の先輩方より頼りない筆者らと『ジオパーク新聞社』を実施して下さいました。悪天候にも見舞われ、ご心配をおかけしたと思います。それでも最後まで支えて下さり有難うございました。

石川県白山自然保護センターの野上さんには、はじめて白山麓実習に関わって頂きました。オキナグサだけでなく白山の自然を守っていく情熱を伝えて頂きました。次年度以降も実習でもオキナグサを守るべく活動したいと思っておりますので、変わらぬご指導のほど宜しくお願い致します。有難うございました。

そして、白山ろくテーマパークの宮腰さん、中村さん、小村さんはじめスタッフの皆さん。一週間の短い間でしたが、筆者らは公園が第二の実家であるように思っています。また必ず遊びに来ます。お忙しい時期に実習を受け入れて頂き、本当に有難うございました。

こうした歓迎を受けられたのも、過去、白山麓実習の先輩方が築き上げて下さった現地の方々の絆があるからです。人と人との繋がりを目の当たりにし、嬉しさが溢れました。筆者ら4回生も、その絆づくりに少しは貢献できたのかと思うと少しだけ自信になります。後輩たちには、そんな良き伝統を守ってほしいと思っています。

最後になりましたが、昨年は久野先生、今年は佐山先生、二人の先生に支えて頂きました。心から感謝しております。卒業した先輩方、そして実習生の皆、有難うございました。代表としてたくさん迷惑をかけたと思います。しかし、その分、一人一人の力で実習を盛り立てることが出来ました。誰かが秀でるわけでもなく、劣るわけでもなく、個々の力を発揮できた実習だと振り返って思います。昨年、先輩から引き継いだ際にはプレッシャーしかありませんでしたが、それから私たち4回生はチームワークを武器に、自分たちらしい役割を果たせたのではないかと思います。後輩の3回生は初めての实習で右も左も分からない中で逞しく成長してくれました。戸惑いはあったと思います。理解出来ないことも多かったかも知れませんが、それでも最後は「成功」だと言える実習にしてくれました。本当に有難うございました。地元の方々も白山麓実習が長く続いて欲しいと仰っています。筆者は白山麓実習を卒業しますが、今後は支援される側から支援する側へと回って、この実習を支えて行きたいと思っております。

末尾